

Asian Volunteer Report

oct 2011



今年は3月11日の東日本大震災とそれに続く原発事故によって世界の歴史に特記される年になった。その他の事情もあり、夏のカンボジアでのプログラムを実施するかどうか、できるかどうか、ずいぶん悩んだ。

しかし結局は、学生5名、教員2名の計7名で、ほぼ例年通りのかたちで実施することになった。去年は総勢25名だったので、震災の影響は明らかだった。

カンボジア日本友好学園滞任が8月21日から9月3日まで。4日に首都プノンペンの市内見学をして解散した。熱を出したり、下痢に苦しんだりがあったようだが、おきな事故は起きずに終了した。

授業の対象は主に中学1年生三百名ほど。友好学園を卒業した大学生にアシスタントを頼んだので、学生同士の交流も活発だった。

生徒は三百人集まってしまふ。授業をするのに6クラスは設ける必要がある。人手不足を補うのに、カンボジア人大学生のアシスタントに加え、今年は強力な助っ人が登場してくれた。友好学園に滞在して日本語を教えている斎藤さん、西尾さん、山口さんに、授業ばかりでなく本当にお世話になった。

☆ ☆

☆ 今度はタイで洪水が起きている。去年訪問させてもらったバンコクのクロントイ地域で生活向上活動に取り組むドゥアン・プラティープ財団から、洪水対策の活動を展開しているという連絡が届いた。「藤田」

アジアボランティア・レポート 2011年10月

ICアジアボランティア・サポート基金 呼びかけ人代表 藤田悟 (文化交流学科教員)

茨城キリスト教大学

現代英語学科 2年

鈴木 香奈

教えることは 二度学ぶこと

今年は5人

“ただいま！”

“モイ チュナム クラオイ！（また来年！）”あれから約一年、今年も暑い夏がやってきた。気がつくと思慣れた愛用のバックパックを背負ってタイからの国境を渡っていた。相変わらず空は青く高く、雨季であっても晴れの日には太陽が暑く照りつける。国道一号線を走るヴァンの中から外を眺めれば高い木があちこちにそびえ立ち、雨でできた水たまりには太陽がキラキラと反射している。水たまりの中では小さな子どもたちがキラキラした笑顔で元気よくはしゃいで遊び、その横では牛使いであろう男の子が牛を連れて歩いている。まだまだあまり舗装されていないでぼこ道が学園へ向かうわたしたちを迎えた。

去年は20人以上いたこのプログラムも、3月11日の東関東大震災の影響か、今年は学生5人の参加だった。クラスは全部で

6クラス、それを毎日ローテーションで教える。去年は1クラス約3人の学生で担当していた授業は、今年は1クラス1人でこなさなければならなかった。果たして1人で300人も生徒にうまく教えられるのだろうか、そんな不安しかなかった。

到着

学校に到着して待ちきれなかったわたしはすぐにヴァンの窓から飛び出して学園に降り立った。オレンジ色の屋根に黄色の校舎、学校に入っただけに見える大きな木、サガハウスに学園のど真ん中にある小さなバスケットボールコート。思わず“ただいま！”と大きな声で叫んだ。ヴァンから荷物を降ろして準備を始めてしばらくすると見慣れた顔の子どもたちが学園に遊びにきた。子どもたちは真っ先に走ってきてわたしを見るとカンボジア語で何か話しかけてくる。すると“Hello, Hello, Hello, How are you?”とわたしが去年教えた英語の歌を元気よく歌いだした。去年も夏休みに学園に通って勉強していた生徒たちだった。それを聞くとうれしくなって思わず大声と一緒に歌った。“帰ってきてよかった”、心からそう思った。

朝5時

朝5時、今年も去年同様に学校の塀の



上に座り朝日を待った。ゆっくりと太陽が地平線から顔を出し、あたり一面が明るくなっていく。改めてカンボジアの空の広さを実感した。今年は学校の近所にある食堂に朝ごはんを毎日とりに行った。まだ朝の5時にもかかわらず村は日の出とともに動き出していて、朝ごはんをもって学校に戻る頃には何人かの生徒が学校の大きな木の下のベンチに座って勉強していた。“スースダイ（おはよう）”と声をかけると、“おはようございます”と日本語でかえってきたときにはさすがに驚いた。

名札づくり・クラス分け

午前7時、学園の図書室にはたくさんの子どもが集まっていた。“わたしの名前はカナです。あなたの名前は？”アシスタントのカンボジア人の学生に手伝ってもらいながら生徒の名札を作っていく。生徒たちは恥ずかしがりながら名前を言うと手を合わせて“オークン”と言って走り去っていった。まだ新品の名札を手にして教室へ走っていく生徒たちの目は輝いていた。

授業

教室に入ると授業の合図、黒板の前に立つとなぜだか毎回緊張する。今回は特に1人で1クラスを教えたこともあってこれまで以上に緊張したのを覚えている。“自分が緊張すれば生徒も緊張する。”わかっただけだけれどどうしても緊張は取れなかった。それとは裏腹に、生徒たちは黒板に書かれた文字を一生懸命にノートに写し、“Repeat after me”といえど大きな声で元気よく返してきた。説明が難しく伝わらないときにはアシスタントの学生に通訳してもらい、“ヨルター？（わかった？）”と聞けば“ヨル！（わかった！）”大きな声でかえってくる。去年とは何も変わっていない、まだまだ未熟で不恰好なわたしの授業を真剣なまなざしで生徒たちは聞いてくれた。“もっとわかりやすく、もっと楽しく教えてあげたい。”気づくと教えている側の自分が生徒たちからたくさんのお話を学んでいた。“教えることは二度学ぶこと”、まさにその通りだった。

休み時間

休み時間になると管理人さんが小さな売店を出す。キンキンに冷えたジュースやフランスパンに練乳をかけたおやつ、小分けのスナック菓子にサトウキビジュースもあった。今年はひまわりの種（食用）が生徒たちの間ではやっていたらしく毎日必ず手のひらいっぱい生徒からもらった。日本語のクラスで教わったばかりの折り紙の鶴を手にとって走ってきてプレゼントしてくる子、後ろからいきなりこちょこちょしてくる子、毎日手紙を書いて渡しに来る子、“おんぶして！”と喋って飛びついてくる子、みんなみんなかわいくて仕方がなかった。

授業後

“カナ、今日歌ってた歌教えて？”授業が終わるとまだ小学生にもなっていない生徒たちが生徒のいない教室に遊びに来る。いつもうらやましそうに授業を覗いている子どもたちだ。ゆっくりと授業で教えた英語の歌を毎回教えても“やっぱわかんない！”と喋って無邪気に走り去っていくと思うと、友達をたくさん連れてきて“鬼ごっこしよう！”と少し疲れた私に元気よく話しかける。どんなに疲れていても笑顔を見るといつの間にか裸足で子供たちと校庭に飛び出している自分がいた。

午後になるとそれぞれ自由に過ごした。みんなで井戸に集まったらいに入った洗濯物を足踏みして洗濯をしたり、学園から10分ほど歩いたところの市場に買い物にいったり。買い物が終わると毎日カキ氷スタンドでおばちゃんが作るカキ氷を食べて帰るのが日課だった。校庭で遊んでいる子どもたちに混ざっていったり、学園の近くの食堂でハンモックに揺られてコーヒーを飲んだり。カンボジア人と日本人全員で“ケイドロ”をしたりもした。夕方にスクールが降ったときにはず濡れになりながら雨の中子どもたちと鬼ごっこをするのも楽しかった。

夕食

夕食の時間になると学園で飼っている子





猫のリヨンがテクテクと近づいてくる。毎晩ご飯の最中に膝にのぼっては“ニャー”とご飯をねだってきた。かわいいけれど膝はリヨンの引っかき傷でいっぱいだった。夕食が終わり、食器を片付け終わると職員室の片隅でカンボジア人の学生とカンボジア語と日本語を教えあったり、音楽を流して一緒に聞いたり、学校での話をしたり。時には手遊びをして遊んだりもした。職員室のテーブルの上にはいつもカンボジア語で書いてある日本語辞典が置いてあって、暇さえあればみんな勉強していた。ノートにはたくさんの日本語や英語がメモしてあって、綺麗に漢字がならんでいることもあった。わたしたちが知らない間に学生はみんな勉強していたのである。毎日授業が終わって安心しているだけの自分が少し恥ずかしくなった。

天の川

今年は特に雨が多く、夜から明け方にかけて雨が続くことも珍しくはなかった。今年は天の川は見えないかな、とあきらめかけていたある日、満天の星空が見えた。真先に虫除けスプレーを全身にかけるとブランケットをもってバスケットボールのコートへ寝そべった。空には数え切れないくらいの星がちりばめられ、流れ星があちらこちらで流れ、真ん中には天の川がみえた。

お別れ会

プログラム最終日、図書室に集まって毎年恒例のお別れ会。今年は日本語のクラスで教えたゆずの「またあえる日まで」をみんなで歌ってくれた。リズムも歌詞もカンボジアの歌とはまったく違う、覚えるのはきっと子供たちには難しかっただろう。それでも大きな声でニコニコしながら、覚えてたての歌の歌詞を目で追いながら一生懸命歌っていた。そのあとにさらに大きな声で歌ったカンボジア語の歌はすごく印象に残っている。お別れ会が無事に終わり、帰る準備をしようとするのとたくさんの生徒たちが学園に遊びに来てくれた。夕方までに終わらせなければならないパッキングも片付けもすべて忘れて日が暮れるまで遊ん



だ。

友好学園最後の朝、食堂で荷物を片付けながら“帰りたくないな”とずっとつぶやいていた。長いようで短かった2週間。たくさん大変なこともあったけれど、同じ分だけ、いや、その2倍楽しいこともあった。教室でのたくさんの笑顔、学校を走り回る子どもたちの姿、井戸での水遊び、学校の前のコーヒー屋さん、満天の星空に毎日食べたかき氷、すべてが恋しくなった。またいつか絶対に戻ってくる、そう誓ってヴァンへと乗り込むと国道一号線に戻っていった。

小さな村で出会うのは大きな笑い声とかわい笑顔、どこまでも続く大きな空にキラキラの太陽。

さようならじゃなくて“またあえる日まで”！

文化交流学科 4年

市毛 孝史

交通・電気 インフラの充実

朝、目を覚ますと目の前には蚊帳があり、朝日の射し込みで見える埃越しに僕らの寝床としている友好学園の教室のひとつの天井が見える。そこの空気は決してよくはない。少し体が痛む。それは蚊や簡易な木のベッド(ベッドと言えるのだろうか?)によって身体が十分に休まらないからだろう。友好学園での朝は早い、朝の5~6時に起きる。重い身体を起こして、教室の外に出てみる。そこには校庭と子供たちが学ぶ校舎が見える。僕は日本語を教えにここに来た。僕はもう気づいたらカンボジアにいた。

2009年

僕は2009年にここカンボジアを初めて訪れた。その時に抱いていたカンボジアのイメージというものは「貧困」「戦争」「地雷」「売春」そういったネガティブな既成概念だ。それらを抱きながら初入国した。正直

怯えていた。しかし、鈍器で頭を殴られたようなカルチャーショックを受けた。現地の様子と僕のイメージはまったく違っていたからだ。現地ではそのようなイメージは目を凝らせばまだ存在していることがわかる。しかしそれ以上に僕は日々を精一杯に生きる人々やその笑顔から平和を感じることが出来た。その相違は僕に一種の感動を与えてくれた。メディアで知る情報と実感を持って情報を得るものでは感動の質がまるで違うことが身をもって体験できた。

2011年

2011年8月、僕はまたこの土地を訪れた。理由がいくつかあった。2009年に力を入れられなかったカンボジアの子供たちへの日本語教育のリトライ。ここ二年で身につけた知識・知恵を通して見るカンボジアの世界。カンボジア人の友との再会。個人的な理由で2週間の滞在を1週間で帰ってきたのだが、これらをすべて果たすことができた。

2011年のカンボジアには現在進行形で

進む潜在性をもった小さな変化が見られた。交通・電気インフラの充実が2009年のカンボジアでは見られなかった風景である。それはどこまでも広がる平野のうえの舗装もままらない国道に豚や牛、犬や猫などの家畜や番犬などの動物達にまじって生活するカンボジア人たちの中に存在していた。(この風景は首都プノンペンから三時間ほどにあるリング村という所) カンボジアは静かに、確かに前へ進行していた。

冒険

僕は2009年にカンボジアを訪れたのを機に様々な国を訪れ、旅をした。これらの経験は文化交流という名のもとに好奇心と行動力を刺激され、冒険……知の冒険へと駆り立ててくれる。この冒険では社会を見る視野が広がり、能動的に自己を開発するきっかけにもなる。これはとてもワクワクすることだ。こういった意味も含め僕は文化交流を実感を持って体験する入り口として、カンボジアをおすすめしたい。

文化交流学科 2年
砂押 嵩人

一発目の授業 大失敗

とうとう今年もこの季節がやってきた。そう、カンボジアに行く季節だ。私は去年みんなにまた来年来るという約束をし、日本に帰ってきた。最初は、また来年も行くことに多少の義務感のようなものがあつた。しかし、だんだんと日が過ぎていくとその気持ちはだんだんと薄れていき、逆に楽しみという気持ちが大きくなっていった。またカンボジアのみんなに会えると思うと、授業の準備も、週に一回のミーティングもすべてが楽しく思えてきた。もちろん、不安な部分もあった。今年は去年のように先輩に頼ってばかりではなく、自分が中心となってプログラムを実施すること、

そして5人しか参加者がいないので授業を一人で行うことなどいろいろと不安はあつたが、とにかく楽しもうと思ひ深く考えないことにした。

出発

そうしているうちに出発の日になった。飛行機を降り、まず最初に疲れたというよりも、帰ってきた、懐かしい、という感じがした。去年も行ったタイのカオサン通りに行くと、去年喋ったお店の人がたくさんいて、もっと懐かしいという気持ちでいっぱいになった。

このカオサン通りも、先日のカンボジアとの戦争で、何人も人が亡くなったことと、こんな身近に感じる場所で戦争が起きていることには本当に驚いた。

失敗

カンボジアに入り、プログラム開始前日のカンボジア人の学生たちとの食事会で、





プノンベン郊外の Kawajijuku Dorm を訪問

去年のプログラムに参加していた学生に会った時は思わず飛びついてしまうほど嬉しかった。そしてプログラムが始まり一発目の授業、一人で全部をやるのが難しく、大失敗をしてしまった。それでもその日の晩に他のグループやカンボジア人と細かくミーティングをして、次の授業からは大きなミスもなくこなすことができた。

星空

そして午前中の授業が終わり、午後になると去年と同じく、生徒のみんなとスポーツをしたり、いろいろな話をして盛り上がったたり、近くの生徒の家に行ったりして過ごした。夜になると、晴れの日には外で横になって一面に広がる星空を見ていた。

授業も終盤になってークラスずつ最後の授業になった。最初は時間が有り余って早く終わってほしいと思ってしまったこともあった授業も、最後になるともっと長く授業をしたいとも思うようになった。一日一日が寂しく思えてきた。去年は笑って終わっていた最後の日の授業では、生徒たちに話をしているときに自然と涙がこぼれた。お別れ会も楽しく終わり、プノンベンに戻る日に朝起きてから時間があったので学校の周りを散歩していた。たくさんの生徒たちや、村の人たちと話していると、また来てねと言われたので、いつかまた来るねと言ってプノンベンに戻っていた。



gecko というのがマレー語などでの名前。カンボジアでは「トッケイ」という。日本でも目にする小さいヤモリ「チンチョ」はどこにでもいるが、大きいトッケイを見るのは初めてだった。全長 30cm ?

学生寮

プノンベンを見学しているときに行った、KAWAIJUKU DORM に行くと、そこには去年通訳してくれた学生のソックスがいた。思わず大きな声をあげてしまった。話を聞くと、ここにはソックスと同じく去年通訳してくれた学生のサッカー、今年もお世話になったトニーが暮らしているらしい。

戦争博物館

カンボジアを出てベトナムを旅行したときに、ベトナムの戦争博物館を見学した。最初は軽い遊び感覚で行ってみたいと思って行ってみた。しかし、中に入ってすぐにその気持ちは無くなった。最初に見たのが、牢屋の写真や拷問の写真だ。同じような写真は去年ツール・スレンで見たが、何度見ても言葉を失ってしまう。いくら戦争とはいえ、ただ殺すだけではだめなのか、骨と皮だけの状態になるまで拷問をする意味はあったのか、全く理解ができなかった。次に見たのが、戦争時にアメリカの枯葉剤攻撃による被害者の写真だ。その写真には肌がただれてしまっている人、枯葉剤の影響で産まれた奇形児が写っていた。その中にはテレビでたまに目にする、双子のベトちゃん、ドクちゃんの写真もあった。二人がこの戦争の被害者だということはこの時初めて知った。そして、博物館を見学して一番驚いたのが、奇形児のホルマリン漬けだった。そこには三人の子供がいた。二人は体がくっついており、もう一人は顔や体がちゃんとできていない状態だった。このような問題は今でも続いているらしい。アメリカはここまでする必要はあったのか、なぜ兵士ではなく、関係のない一般の人がこのような被害にあわなければならないのか、自分には全く理解できないことばかりだ。今、授業で戦争のことを学んでいるが、戦争というのはどんな理由があったとしても、自分には言い訳にしか聞こえない。戦争博物館でも疑問の残ることばかりだった。

今回の旅で得たものは多いと思う。自分の

身の回りの細かいことから、大きな問題まで、様々なことを改めて考えさせられた。

現代英語学科 1年

鴨志田 渉

カンボジアがくれたもの

照りつける強烈な日差し、広大な草原と水田風景、体に寄ってくる虫達。プログラムを行ったカンボジア日本友好学園はそんな環境のなか、カンボジア・プレイヴェン州の郊外にある。

不安

人に教えるだけの英語知識も無ければ、誰かに勉強を教えたことも無い。そんな状況のままプログラムへ臨むことがとても不安だった。どんな授業をすれば皆が楽しく学べるだろうか、しっかり理解できるだろうか、何度考えても十分に納得できる考えは思い浮かばず、プログラムはスタートしてしまった。

しかし子供たちは私たちの授業についてきてくれた。積極的に発表し、元気に発言し、屈託のない笑顔でみんなは私たちを迎えてくれた。いくつか授業をこなすと、その日の反省を生かして授業を改善できるようになり、初日ではわからなかったことに気付いてきた。「子どもたちはいつも笑っているけれど、本当の笑顔なのか、困り笑いなのだろうか」、「教室の後方にいる子は理解していない子が多い」など、慣れるとクラス全体に目がいくようになった。そこで、教室の後方にいる子には席の隣へ行って個人的に教え、授業のサポートをしているカンボジア人の学生に授業で使えるようなクメール語を教えてもらい、英語だけでなくクメール語も時折交えながら子供たちと会話するなど工夫した。すると子供たちから私たちに積極的に質問をし始めた。「これはなんと読むの?」「こっちの言葉の意味は何?」「英語で……はなんと言うの?」とても嬉しかった。発表を積極的

にすることはあったが、自ら学ぼうとする姿勢を見せたことは無かったので、そのような姿勢を見せてくれたことが嬉しかった。また、前の授業で教えたことをしっかり覚えてくれている子もいて、自分の生徒たちが成長する喜びを知った。「今みんなが英語を学ぶ過程に自分がいるんだ」、「将来まで役立つであろう彼らの英語の基礎の部分を自分が教えているんだ」。そんなことを考えると中途半端な気持ちでは授業をすることはできなかった。「もっともっと上手く教えてあげたい」と思って授業に臨むほど、子供たちの成長を喜ぶ気持ちが大きくなっていった。

アシスタント

授業のサポートをしてくれたカンボジア人学生との交流も、自分にとって大きな経験となった。日本人とあまり変わらない速さで日本語を使いこなし、その上英語まで使いこなすという彼らの語学力の高さに私はとても驚いたと同時に、自分の半年間の大学生活を反省した。授業を真面目に受けずにダラダラと半年を過ごし、時に授業をサボって遊んでいることもあった。そんな自分が偉そうに子供たちに英語を教えることに、恥ずかしさや申し訳なさを感じた。そして、学生たちに追いつくぐらい英語にしっかり向き合って勉強しようと決心した。私の授業のサポートをしてくれたのはチョリサとソリの2人で、2人には授業中何度も助けられた。私たちが子供たちに伝えたいことを理解してくれて通訳してくれただけではなく、もう一人の先生としてサポートしてもらったこともあった。授業中は基本的に英語で話していたので、彼らが私のへたくそな英語をうまく聞き取れずに思い通りの授業ができない日もあり、自分の英語のつたなさを改めて痛感した。しかしそんな日でも、彼らは「スイマセン」、「Sorry」と言ってくれた。

遊び

授業外でもカンボジア人と交流する機会があった。授業の間にある10分間の休み時間になると、悪ガキたちとちょっかいを





現代英語学科 1年

水嶋 洋貴

私にとって 初めての海外

怖かった

私にとって初めての海外、それがカンボジアでした。カンボジアのイメージというと、地雷、病気、貧困、などマイナスなイメージばかりが思い浮かびました。なので、初めての海外がカンボジアということにとっても不安で、なおかつ自分たちの力で現地まで行かなければならないということがとても怖かったのを覚えています。日本でのミーティングや準備の段階で、さまざまな注意点（一人歩きはしない、バッグはなるべく背負わず前で持つ）などを聞き、日本のように安全な国ではないと思いました。日本での当たり前は通用しないことを常に気をつけ、気を抜かずにいこうと思っていました。

そして、実際にカンボジアに着いて最初に思ったこと。それは、やはり怖いということでした。国境付近を歩いていると現地のクメール語でいきなり話しかけられたり、荷物を掴まれそうになったこともあり。こんな危険な場所で二週間も生活できるのかと思いました。

ストリートチルドレン

国境付近から都市部のほうへ移動し、都市部がとても発展していることにとても驚きました。ビルが立ち並び、ものすごい量の自動車が行きかう街は、私が思っていた以上でした。ですが、その一方でやはりストリートチルドレンなどもいました。10歳にも満たないような子供たちが夜遅くまでミサンガや様々なアクセサリーを歩きながら売っており、このような日本では考えられないようなことに、衝撃を受けました。私の日本での生活は、生きていくために必死になるような生活ではありません。だが、とても必死に売り歩いている子供たちを見ると、自分の日本での生活はなんてあまく

出しあったり、「パウシンソー！」の掛け声で始まるカンボジアのじゃんけんをしたり、指相撲や腕相撲、押し相撲をして子供たちとずっと遊んでいた。授業は午前中だけなので午後になると近所の子供たちがグラウンドに集まり、暗くなるまで汗びっしょりでスポーツをする。言葉はいらない。勝手に混ざって勝手にパスを要求すればみんなが笑顔で迎えてくれる。時には彼らのほうから手招きされて誘われることもあった。シュートが決まればみんなで喜び、また本気になってボールを追いかける。表情やジェスチャーがあれば、言葉がわからなくても心は通じ合えるということをサッカーしながら実感した。同じ年代の子にも「センセイセンセイ」と呼ばれていたことにはとても違和感があったが……。

日本とは違う環境での生活にストレスが溜まり、嫌気がさすことが何度もあった。けれども、子供たちの笑顔は私のそんな思いをどこかへやってくれた。どんなに疲れた気分でも少し熱が出てだるくても、みんなの笑顔を見るとがんばることができた。

私は忘れない。あの強い日差しも、サポートしてくれたカンボジア人の優しさも、見知らぬ子とのサッカーも、お別れ会の後にもらった名札も指輪も折り鶴も。

そして、子供たちのめちゃくちゃ可愛い笑顔も。

自堕落な生活をしているのだらうと思われました。それと同時に、今自分が生きていることは自分の力ではなく、周りの人々の支えによって生かされていることを改めて知りました。毎日食べるものはなにかしらあって、そのうえ学校に行き整った環境で勉強ができる、このような生活ができることに感謝しなければいけないということも知りました。

授業

そして都市部から学校のほうへ移動。生徒たちへの授業は、うまくできるのかと緊張と不安しかありませんでした。実際に授業をやってみて思ったことは、カンボジアの生徒たちがとても積極的で、皆真面目だということでした。どんどん質問してきたり、問題を出すとたくさんの生徒が挙手してくれて、本当に勉強をしたいんだな、と思いました。ある授業では、なんと生徒たち全員の手が挙がり、ものすごく感動したことを覚えています。電気もなく、クーラーもないとても暑い環境の中で必死に勉強に取り組む生徒たちの姿は、だらけた学校生活を送っている自分にとっての戒めともなりました。授業の間の休み時間は、みんなやんちゃで可愛くて、とてもフレンドリーに接してくれました。授業で分からなかったことを聞いたり、じゃんけんしたりと気軽に接してくれた

のでより楽しく授業も進めることができました。そうしたうえでもなかなか授業をうまくできない自分が悔しく、生徒たちに申し訳なく思ったことも多々ありました。それでも自分たちのとても下手な授業をうまく進めることができたのは、生徒たちが積極的に授業に取り組んでくれたこと、そして現地の学生のサポートがあったからだ

と思います。最後の授業は、下手な授業にここまで頑張ってくれた生徒やサポートしてくれた学生の方に感謝の気持ちでいっぱいでした。そして、最後の授業のあとに行われた farewell party での生徒からの言葉で、本当にプログラムが終わってしまうんだなあということをより実感し、達成感も少しはあったがそれ以上にさびしい思いがありました。後にも先にもこんな素晴らしい子供たちには会えないかな、と思うほどでした。

ときにはつらくて苦しい時期もありましたがそれを乗り越え、勉学の面だけでなくより精神面が成長できたのかな、とも思います。最初はただ海外でボランティアを試みようかな、というただそれだけの気持ちで参加したプログラムですが、たくさんの貴重なことを得ることができ、そして少しでもカンボジアのためになることができたのならとても幸せだと思います。

私がカンボジアで一番心に残ったのは、子どもたちの笑顔でした。どんなにつらくても、みんなの笑顔のおかげで頑張れました。

カンボジアでの思い出、支えてくれた方々、両親への感謝、そしてとっても眩しい子供たちの笑顔はこれから先絶対に忘れない。





Of Mice and Fireflies

Harris G. Ives

Summers in Cambodia have become a tradition that I cherish. Last August, for the fourth time I had the pleasure of working with a team of Ibaraki Christian students doing volunteer teaching at the Cambodia-Japan Friendship School. The experience affords many delights: (1) watching the Japanese students cultivate a love of teaching English and Japanese (2) appreciating the eagerness with which Cambodian middle schoolers approach second and third language acquisition, and (3) living in an environment where the splendors of nature are manifested in the teeming animal and insect life: geckos, lizards, mice (perhaps even rats), cats, dogs, and fireflies.



One morning about two o'clock, I was startled by something large jumping on my chest as I lay in bed. I had heard mice scurrying beneath the bed earlier in the night, and I could only assume that one particularly bold rodent had accepted and passed the challenge of the vertical limb up into my bed. Such a "monster" would have had to figure out how to lift the thick mosquito netting about me. Feeling the sudden weight upon me, I yelled in the dark. Quickly grabbing my flashlight (to use as an illuminator and as a weapon), I stopped instantly: the intruder was the cute kitten that had taken up residence with the volunteers from Japan. Falling back upon my pillow, I eventually went back to sleep: my left hand still clutching my heart; my right hand softly stroking the kitten – she, too, had had the fright of her young life.



The cat decided to desert me an hour later, and I was awakened by the movements of her departure. There in the total blackness I became aware of three fireflies encircling my bed. They were the brightest fireflies that I have ever seen. Unlike the fireflies I played with in childhood, these Cambodian cousins did not pulsate – their light remained constant (the insects of youth in New Orleans gave off a warm yellow glow which would switch off for nano-seconds as the bugs pulsated.)

Enjoying the beauty of the fireflies, I couldn't decide I should awaken Professor Satoshi Fujita in an adjoining bed. I finally opted not to disturb him. In the morning, he told me of seeing the beautiful lights and had briefly considered awakening me and calling my attention to them, but he finally thought to let me rest. Though we were considerate of each other's rest, it is always good to have a witness when experiencing something beautiful.



I was grateful for the light of the fireflies, and quickly imparted symbolism to it: the lights were akin to our efforts to provide language learning opportunities to the gifted Cambodian children. The lights were also akin to the hospitality of the Cambodians toward the volunteers. Our Cambodian experience is a light that is shared among university students, Cambodian children, and the village of Prey Veng.

◆ Thon Dane (アシスタント・リーダー)

今年のボランティア活動は日本人が少なくて、でも、私は参加できてうれしかったです。去年カンボジア友好学園の学校へきたことがある学生がいたので、授業をうまくできました。

二週間の授業では、日本人のみなさんとアシスタンはいっしょけんめいがんばって教えることができました。カンボジア人の子供たちは日本人の学生からいろいろな勉強を教えてもらいました。

カンボジアの学生はいつもでも日本人のみなさんのいい活動をサポートしています。私はボランティアプログラムを続けてほしいとおもっています。



◆ Chet Tony (アシスタント)

ボランティアの活動は2回目の参加です。ボランティアのかつどうは、役に立つと思います。子供たちに日本の文化や字や英語知識を教えることができました。私の知識はあまりなくても、みなさんといっしょに参加できて、とてもうれしかったです。日本人の皆さんが教えて、子供たちと遊んだり、スポーツをしたりしました。教えるとき日本人はいっしょけんめいおしえています。学生たちはあまり話さなくても、あまり上手じゃなくても日本人はかんばつています。

日本で地震があつても皆さんは時間もお金も使って、カンボジアに来

てくれました。さいごに、日本人の皆様、お元気でください。またらいねんあいましょう。

◆ Nou Chantha (アシスタント)

先生とボランティアの学生のみなさんがカンボジアに来てカンボジア日本友好学園の生徒たちに教えてくださって、本当にありがとうございました。先生や学生たちと一緒に教えたり、しゃべったり、旅行したりして、とても楽しかったです。またチャンスがあったら参加したいと思います。ところで、先生と学生さんたちはカンボジア日本学園の子どもたちが好きですか。

ボランティアの学生さんたちの教え方はとてもよかったです。

なぜなら、学生さんたちが教えるので子どもたちはたくさん勉強してとても楽しかったです。また、みなさんの学生たちは明るかったし、子供たちと遊ぶこともくれたし、勉強に役に立つことをしてくれました。

カナさんと一緒に英語を教えるのはとても楽しかったです。カナさんの教え方はとても面白くて、子供たちに人気がありました。カナさんに「チャンター、ちゃんと寝ているね」といわれましたが、そういうことはとてもたのしかったです。

先生と学生たちのベトナムの旅行は楽しいですか。フォーも食べましたか。フォーは美味しかったですか。お体に気をつけてください。



アジアンボランティア 2011 会計報告 担当 鈴木香奈、鴨志田渉

単位は全て US\$

収入	学生企画奨励金	¥75,000	941.0
	参加者負担金		2300.0
	現地日本人ボランティア食費		66.0
	収入計		3307.0

支出	外食	820	Calmette 30人 \$268	660.55
		827	PreyVeng 昼食 13人 \$55.3	
		827	PreyVeng 夕食 \$17.25	
		828	NeakLoueng 昼食 Mekong \$81	
		904	PNH 昼食 \$84	
		904	PNH 夕食 Rasmey 鍋 \$155	
	市場での買い物	8/28-9/2	水、果物、ティッシュ、牛乳、氷、プロパンガスなど	148.525
交通		821	PNH ⇒ 友好学園	70
		827-8	学園 ⇄ PreyVeng	70
		903	学園 ⇒ PNH	70
		904	PNH 市内 TukTuk 2台	30
食費			学園での夕食・出前 267.5	348.75
			学園での朝食・出前 81.25	
	アルバイト謝礼	1人1日\$3、リーダー(Dane)\$5		185
	ホテル	827	PreyVeng 1室 \$10 × 6室	60
寄付等		902	友好学園施設使用料、寄付	1,050
		904	LightHouseOrphanage 寄付	300
		904	PNH 学生寮生に	100
	支出計			3,092.825
	差し引き残高(理論値)			214.175



◆上記は基本的には8月20日から9月4日までのプログラム本体をカバーする計算。ただし最初と最後のプノンペンのホテル代は個別に支払った。
◆現金残高は\$190 + 62,900リエル(= \$15,725)で、計\$205,725となる。残高(理論値)\$214.175との誤差は\$8.45、ドルとリエルを併用していることから許容範囲内と考える。残額はアジアンボランティアの基金として残すこととした。
◆以上の拠出金のほかに、各参加者は航空運賃(6万~8万円)などの交通費、カンボジアのビザ代金(\$20)、プノンペン泊のホテル代(1泊\$10~15程度)などを支払った。アンコールワット観光を含めて、15万円あれば充分であったようだ。\$1=80円程度であることも幸いした。
◆アジアンバザール終了後、アジアンボランティア・サポート基金の募金とバザールの収益を東北大地震の義援金に当てる予定。

アジアンボランティア 2011

参加者

文化交流学科

2年/砂押嵩人、4年/市毛孝史

現代英語学科

1年/鴨志田渉、水嶋洋貴

2年/鈴木香奈、

現代英語学科教員・Harris G. Ives

文化交流学科教員・藤田悟

